

# 東洋文化研究所図書室の資料移転と保全活動

## 東洋文化研究所図書室

### はじめに

本日はお忙しい中を第4回アジア古籍保全講演会にご参加いただき、ありがとうございます。東洋文化研究所は平成17年から4年間の時限付き教育研究事業費を頂き、資料の保全と電子化、およびその公開に努めてまいりました。事業を遂行し勉強する中で、より知識を深めたい、直接に専門の方々の講義を受けたいと思い、また多くの図書館職員や古籍保全、電子化にかかわる方たちと知識を共有したいと思い、講演会を行ってまいりました。突然のお願いにもかかわらず快く講演をお受けくださった講師の皆さまに心からお礼を申し上げます。

今年はアジア貴重古籍保全と電子図書館事業の最終年ではありますが、業務を遂行するに当たり、必要な知識を深めていくための場を持つことを、この後も何らかの形で続けていくことができると考えております。くしくもこの4年間は、当所の建物が大幅に耐震基準を満たしていないことが判明し、所全体が移転、史料編纂所や医学部から部屋をお借りして臨時閲覧室での閲覧業務、その後、完全に閲覧業務を停止して、約64万冊の資料を32カ所に分散して退避し、再配架を行うという、ほとんどの図書職員が経験したことのない大きな業務を遂行する時期と重なりました。この4年間のうちの3年間は、私の前任の栗林主査が図書室を統括し、この難事業を遂行してまいりました。

当図書室の4年間の取り組みについて、蔵書の移転先探しから始まり、耐震工事後の書庫のレイアウト変更に伴い一から配架計画を立て直すなど、苦勞の多かった「蔵書移転について」を安食から、「移転中の資料保存環境の調査について」を塩川から、「アジア貴重古籍保全と電子図書館事業への取り組みについて」を田崎からご報告いたします。現在、東京大学内だけではなく、複数の大学及び機関で耐震工事が行われております。事例報告の中から、何か少しでも皆さまの参考になるものがあれば幸いです。

(東洋文化研究所図書室主査 風巻みどり)

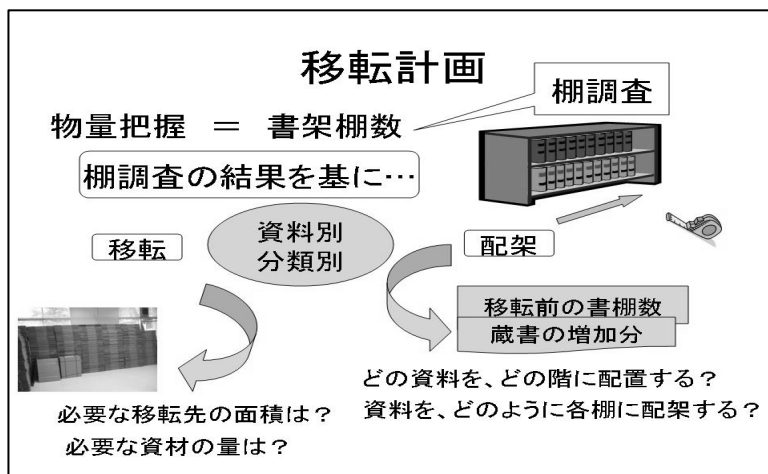
## 蔵書移転について

安 食 優 子（東洋文化研究所図書室 整理・サービス担当）

当研究所ではアジアや、それにかかわる北アフリカなども含めた、広範囲なアジア諸地域のさまざまな分野にわたる資料を収集しています。移転前、2006年11月の時点での蔵書は63.9万冊です。当所の耐震強度が問題となったのは2006年2月ですが、建物全体の耐震補強工事が必要と分かり、所の研究員や職員とその業務にかかわる物品だけでなく、この蔵書約64万冊すべても建物の外へ移転させなければならなくなりました。

そこで移転の計画を立てることになりました。まず、物量を把握する必要があります。移転の際、資料の保管に必要な移転先の場所面積を割り出す、段ボールなど必要な資材の量を割り出すというだけでなく、耐震工事後、建物へ戻ったときにも、配架に必要な書架数の算出、どの資料をどこに配架するかといった配架計画を立てるためにも、物量の把握というのは必要です。

本1冊といっても、分厚い本もあれば薄い本もありますので、物量は冊数ではなく資料の配架されている書架棚数で把握する必要があります。そこで書架棚数を算出するための調査として、棚調査を行いました。棚調査は、各書棚で資料が実際に占有している書棚分の長さを測るので、メジャーを使って1段ずつ職員が手分けをして測っていきました。移転する対象の資料はすべて調査しました。調査した何千、何万センチという長さから、資料別、分類別の書架棚数を算出して、その書架棚数を基に移転先を探したり、工事終了後に蔵書に戻す際の配架計画を練ったりしました。



蔵書はさまざまな資料によって構成されています。図書、雑誌だけではなく、漢籍、マイクロ資料など、いろいろな資料があるのですが、図書は、和書、洋書、中国書、韓国書、そのほかにもアラビア語、タイ語など、言語別に分類の体系を分けています。分類体系が異なると配架場所も分かれます。そうやって、一口に図書といっても、移転の際にこれら分類の異なるものはそれぞれ別々に梱包して移転する必要があります。さらに移転先の制約から、

A5 サイズはここ、A4 サイズはこの場所、それよりもっと大きいものはここというように、本のサイズによっても分けて移転する必要がありました。

また、雑誌も図書と同様に、和・洋・中・韓のほかにも、トルコ語、ペルシャ語などのいろいろな言語別に請求記号を付けていますので、言語別に分けて、また新刊分と旧刊分も分けて配架していただきましたので、刊行年度による区別でも分けて移転させています。

また、マイクロフィッシュは一枚一枚が薄いので、フィルムが入っていたトレイごと梱包して移転させました。

漢籍は線装本のもが多く、それらは大概、帙に入って本体を保護するようになっています。そのため、ほかの資料のように一般の物流業者に作業をさせるのではなく、漢籍の扱いに慣れていると思われる図書館業者と職員の手によって梱包しています。また、漢籍は四部分類を基にした東洋文化研究所の漢籍分類に従って配架していますので、その分類に分けて移転させました。

そのほかにも貴重書類や大型本、卷子、軸などがありまして、大型本や軸など、とても大きいもの、長いもので通常の箱やコンテナに入らないものは、緩衝材などでくるんで移転して、移転先ではそのまま保管しています。このようにいろいろな資料がありますので、その都度、どのように移転したらいいのか、職員で試行錯誤しながら資料を移転させています。

移転作業や移転後、工事期間中の管理のしやすさからも、これら資料を1カ所にまとめて保管できる場所があればよかったのですが、大量の資料ということもあってそのような場所を見つけるのは難しく、また、予算の制約もありましたので、他部局の建物を間借りするなどして、結局32カ所に分散して移転することになりました。

学外の機関では奈良国立博物館や印刷博物館に、貴重書類を主に預かっていただきました。貴重書類

は資料価値の高いものですので、学内でも駒場図書館の貴重書庫や文学部の漢籍コーナーなどといった資料の保全を第一に考えた場所へ、まず初めに移転させています。また、移送する際の梱包や配架は、職員の手によって行いました。奈良国立博物館や印刷博物館では預け期間中、委託した資料を用いて展示していただいています。また、奈良国立博物館内の文化財保存修理所に依頼して、資料の劣化部分について、この機会に補修を行っています。



学内は主に本郷、駒場、柏の3キャンパスに分散して移転させました。たとえば教員の移転先の部屋の空いているスペースに図書を入れた段ボールを荷積みしていき、その上に載せた、梱包した軸などが、段ボールやコンテナから落ちないように、ネットで下の箱ごと固定したりしました。

駒場で主たる移転先は旧食堂で、まだ厨房の施設が残っているような場所でしたので、荷積みする場所の周囲をベニヤ板で囲って、さらにベニヤ板で囲いきれない部分はネットで覆って、虫などの進入を避けるような形で場所を確保しました。

また、地下の階にあって、元は別の用途に使われていたような部屋も移転先となりました。貴重書類などの一部の資料を除いてほとんどの資料は、移転先で梱包した後に、その段ボールやコンテナに入ったままの状態に荷積みして保管しました。右下は柏図書館の自動化書庫のコンテナの例です。



柏図書館自動化書庫

資料をすべて出すのに1年かかっています。資料の量が多いことや、2006年12月まで閲覧サービスをしていたこと、また、さまざまな資料があつて、資料によっていろいろと移転方法や梱包の仕方を変えたこと、移転先もすぐには決まらず必要な場所を確保するのに苦労したこと、この量を収めるのにあとどのくらいの場所が必要かとか、移転先の環境をできるだけよく保つように考慮したことなど、検討すべきことが多くあつたため、これだけの日数がかかったものではないかと思っています。

この資料の搬出を行った1年は、棚調査をして移転の計画を立てながら、別の資料の実際の移転の作業を行うというように、いろいろな作業を同時並行していました。

資料の戻しは集中して行いましたが、同じ分類の資料でもいろいろな場所に分かれていたり、資料の分類自体もとても多いので日数がかかってしまい、約4カ月かかっています。

蔵書を戻すときには、蔵書量が増えて65.2万冊になっています。前述した棚調査で割り出した書架棚数と、この蔵書の増加分も加えて配架計画を作成しました。

3	階	45	棚	41段	蔵書部	(印)漢籍41段	物ナシ	(印)漢籍40段
1	2	3	4	5	6	7	8	9
				漢 300	漢 124			
				漢 125				
漢 125	漢 140	漢 109	漢 119	漢 300				
漢 125	漢 140	漢 140	漢 300	漢 125	漢 119	漢 304		
漢 294	漢 144	漢 205	漢 304	漢 125	漢 119	漢 305		
漢 295	漢 304	漢 305	漢 305	漢 125	漢 119	漢 306		
漢 294	漢 304	漢 304	漢 150	漢 130	漢 307			
297	141	漢 304	漢 150	漢 130	漢 308			

左の図のように、配架図を棚ごとに作成しました。この例の場合は、漢籍の叢書部が配架されるということになっていて、ラベルの色から、この一連の書架には4カ所から資料が戻ってくるということになっています。

苦労して移転・配架の計画を立てたのですが、

実際の作業で初めて気付いたことも多く、それらについて幾つか紹介したいと思います。

図書館資料の移転ということで、移転期間中の資料の保全をとっても重視しました。32カ所ある移転先の中には、本来図書館資料の保管とは関係ない目的で使用されていた場所もありましたので、まずそのような場所を保管場所として使用するために、水・ガスを止めてもらう、空調機の設置などの改修をしてもらいました。

ただ、部屋を間借りしている状態なので、改修そのものができる場所もあり、移転期間中の資料の劣化を防ぐため、いろいろな措置を試みました。暗幕を取り付けて紫外線をカットし、また、日光を遮ることで室内の温度を抑えたり、シンクの排水溝やドア・窓のすき間をガムテープやクッションなどでふさぎました。また、市販の燻蒸剤で部屋ごと薫蒸して、移転先の掃除もやっています。掃除が重要で、梱包のときも資料はほこり払いをしてから梱包しましたが、移転先が地下のフロアだったところの資料は、地下は湿気がたまりやすいので、中にちょっとカビの生えたものが1箱見つかったりもしています。また工事改修後も、書架は相当粉塵をかぶっていたので、職員で書架の清掃をする必要がありました。



床と壁板との隙間塞ぎ

また、移転先での荷積みの仕方も工夫しています。例えば漢籍は空調のある部屋で、かつ管理しやすいように事務室と同じ建物へ移転させ、湿気や結露から守るために、床にパレットを敷いて、その上に荷物を積んでいきました。また、下の段ボールにかかる負荷を分散するために、段ボールを格子状に積んでいました。格子状に積むことで、下の方の箱のつぶれがほかの資料よりも少なくて済みました。また、漢籍については、箱内の湿度を一定に保てるよう調湿紙を入れ、さらに、いつでも中身が確認できるように、箱のふたを閉めないというようなこともしていました。



床に敷いたパレット

どこの移転先でも、湿気をなるべく避けるため、窓や壁から数センチ荷物を離して積み上げていました。また、積み荷の間に通路を作って、何かあったときには部屋の奥まで資料の確認ができるようにしています。すべての移転場所について見取り図を作成し、どの資料がどこにあるか分かるようにしていました。

移転後は月2回、定期的に職員が手分けをして移転場所を見て回り、保管の状態や保管先



の環境の確認を行っていました。この環境の確認については、詳しくはこの後塩川からお話しします。実際に、夏場は結露により空調機から水漏れが数回発生しています。急遽、積み荷を移動して、水漏れ部分をビニールで覆うといったような処置をすることもありました。

工事終了後は、人が建物へ戻った後も、工事により発生すると思われる有害物質が資料に悪影響を与える恐れがあると考え、有害物質の測定を行っています。この測定で基準値以内に収まってから資料を戻し始めました。

この写真ですが、有害物質を早く揮発させようと空調機で室内の温度を高くしたのですが、高くしすぎたために張ったばかりの床タイルがはがれてしまったという写真です。結構大変な量がはがれてしまいました。



床タイルの剥がれ

貴重書類は、工事による有害物質の影響をできるだけ抑えるために、最後に戻しています。さらに資料の配架順が狂うと、たちまち図書館では目的の資料にアクセスできなくなりますので、配列直し、つまりシェルフリーディングも重要でした。

移転前は蔵書に比べて書庫のスペースが不足していましたので、書架に収まりきらずに横に寝ている本やブックトラックに乗っているもの、また、ほかの階に別出している資料もありました。蔵書を戻すときには、これらのはみ出し部分もきちんと請求記号順に並べたかったので、梱包作業の前にできる限り配列直しをしました。また、はみ出した部分は、写真のような指示ラベルを立てて、梱包忘れないように、請求記号順にちゃんと梱包されるように配慮しました。

本に挟んだ指示ラベル



こういった本に挟んだラベルのほかに、実際に荷詰めした箱に詰める荷ラベルがあります。この荷ラベルは、どのような順で資料が荷詰めされたかという記録になります。また、ラベルの記入方法を分類別に変えていましたので、そういったたくさんある記入方法についてちゃんと記録を残しておくことは、とても重要なポイントになったと今振り返って思います。資料を戻す際に、配架図を基に配架場所を指示する棚ラベルを作成して張ったのですが、荷ラベルと棚ラベルがうまく対応しないときちんと配架できないからです。

また、左から右への配架というのは図書館職員にとって当たり前だったのですが、配架し

てくださる作業者の人が右から配架を始めようとしてしまったりして、それは一般的ではないのだということをそこで初めて知りました。移転後は、業者さんによる配架だけでは請求記号順には並べきれないと考えて、全書架について配架直しを再びやっています。

最後に、改修は建物の耐震性の強化が目的だったのですが、この改修を機になるべく書庫環境の改善も図ろうと考えました。窓をつぶしたり、以前の事務スペースを書庫スペースに変えるなどして、書棚を増加させることができました。大型本も、以前は書棚で横に寝かせていたのですけれども、大型棚という書棚スペースを作って、寝ていた本を立てるようにして、書棚のスペースの有効活用も図っています。

また、マイクロ室を新たに別に作ることができることとなったり、調湿機能の付いた空調機で夏場は24時間空調をするようになったというのも、この移転後です。また、地震に関する問題に実際にかかわることで、日々接している資料の劣化というだけではなくて、地震などの災害が起こったときにどうすればいいか。図書館全体にかかわる問題について、この移転をすることが考え始める一つのきっかけ、契機になったかと思います。以上で私からの報告は終わりになります。

## 資料移転先の環境調査

塩川 由紀（東洋文化研究所図書室 資料受入担当）

はじめに

移転中は私たちの目の行き届かないところに資料が保管されるために、定期的に移転先の環境や資料の状態を確認する必要がありました。資料の状態に影響を与えるような事態や環境の変化が起こった場合、早急に対応するために、温度や湿度の調査と昆虫類の調査を行いました。

環境調査を行った場所は9カ所23部屋ありました。医学部1号館、農学部2号館別館、工8号館、工9号館、工3号館、理学部・環境安全センターアネックス、駒場学生会館、総合図書館、旧医学部附属病院分院です。環境調査を行わなかった場所もあります。柏図書館や奈良国立博物館などです。これらの場所はもともと図書を保管している場所であったり、資料を寄託していたり、遠方であったりということで、それぞれの機関にお任せしました。

調査の期間は、移転の時期が異なるため場所によって数カ月違いがあるのですが、2007年5月から2008年4月までの1年間はほとんどのところで調査を行いました。ここではこの期間に行った調査についてご報告いたします。

### 環境調査の方法1 温湿度

駒場と分院を除いてエリアを四つに分け、担当者を決めました。月に二度、第1週と第3週に調査を行いました。駒場と分院は本郷キャンパス外なので月に一度調査に出向くことにしました。担当者が作業者を募り、その週の適当な日に調査におもむきました。ただ、梅雨の時期や何か問題が起きたときなどは、見回りの回数を増やしたところもあります。温湿度の計測や昆虫類の調査のほかにも、資料の状態の確認や清掃を行いました。

まず、温湿度調査についてご説明します。アナログ式の温湿度計を各部屋に1~2個設置しました。これは移転前から東文研で使用していたものを流用しました。またデータロガーを購入し、各部屋に1~4個設置しました。設置場所は、中央付近の段ボールもしくはコンテナの上、もう1カ所は部屋の隅の床の上としました。一つだけ置く場合は隅の方に設置しました。部屋の隅は湿気がたまりやすいので、環境のよくない場所のデータを優先して取るためです。計測回数は1日2回、深夜0時と正午としました。

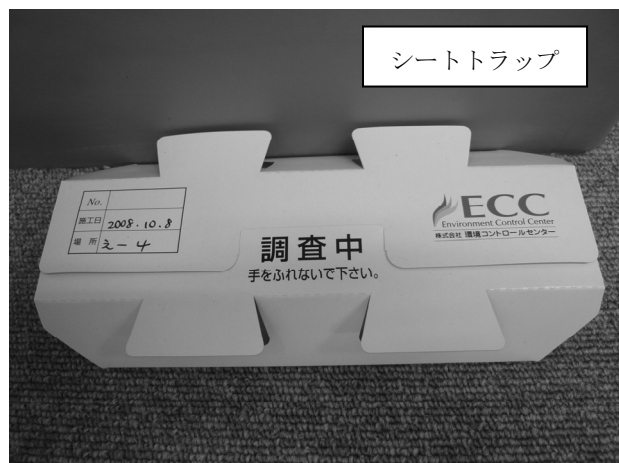




## 環境調査の方法2 昆虫類

次に昆虫類の調査の説明をします。5 m<sup>2</sup>ごとにシートトラップを設置しました。20 m<sup>2</sup>程度の小さな部屋ですと、部屋の4隅に置くことになりました。出入り口付近にも置いたところもあります。また、トラップ以外の場所で虫が多く発見されたところは、しばらく毎日、目視で点検しました。

粘着テープを出入り口や資料の周囲の床に張り、虫の進入を防いだ部屋もあります。ホコリが虫のえさになるので、ホコリがたまらないようにこまめに清掃を行いました。虫、特にゴキブリが多く出る場所には、設置するタイプの家庭用殺虫剤を置きました。



## 調査シート

こちらが実際にそのときに使用した調査シートです。2007年6月8日、医学部のSC401の調査をしたときのものです。調査項目には、段ボール・床等にホコリがたまっているか、窓際等にすき間、雨漏りがないかなどがあります。このときは清掃をしましたという記録がありますが、毎回は清掃していませんでした。

メモ欄に捕獲された虫について記載していますが、作業者によって知識や経験の差があったために、シートトラップを持ち帰って検討することもありました。また、「羽虫」とあるように、俗称で書いてあるものもあって、この場合は多分、羽のある小さな虫という意味で、

それがハエなのか、カナなのか、羽アリなのか分からなかったのでしょうか。検討するときには、クバプロから出ている『文化財害虫事典』をおもに使用していました。

調査場所		日付	温度	湿度	天気	担当者
SC401(医学部)		2017 6.8	21.26 20.29.5	56 59	日青	田山
ダンボール・床等にホコリがたまっているか		ダンボールが湿気たりつぶれたりしていないか				
窓際等に隙間、雨漏りがないか	掃除しました	温度湿度が急激に変化していないか		温湿度計+取り替え×2		
虫がいるか	○ 下記に詳細	温度湿度が適当か		ロビーの近くに置きました		
メモ 流しゴキブリ1 音屋 バックヤード中と同じ虫×2 (書架の上+1) セマシ×2 (ミ?)×1 羽虫×1 シバシバシバ×3 トライゴ 4 羽虫×1 セマシ×1 バックヤード 外 セマシ×4 ゴキブリ×2 中 ゴキブリ×1 セマシ×5 シバシバシバ×1						

## 温湿度の管理

温湿度の管理なのですが、実際これはとても難しく、あまり効果的な対策はできませんでした。空調機を使用できる場所が限られていたので、ほとんど何もできなかった場所もありました。空調機を使用したのは、工学部、農学部、医学部と理学部アネックスです。

季節の変わり目には1週間～2週間単位でデータを採取したり、その場で温湿度計を見てエアコンを調整したりしました。本部棟は、最初は空調を入れていただいていたのですが、全館空調になっていたために夜間は止められてしまって、1日の温度変化が激しくなっていました。そのため結局すぐに空調を止めてもらいました。工学部の空調機は、最初はモードを冷房にしていたのですが、あまり除湿の効果がなかったので、途中から除湿に変更しました。工学部や理学部のアネックスで空調機の不調がありました。除湿時の結露がこぼれたり、配管が詰まって排水が逆流したりということがありました。

壁にプチプチ(緩衝材)を張った部屋もありました。経済学部の書庫で行っているという話を第2回の古籍保全講演会の報告で聞いていたので、外気からの影響を少なくするためにやってみたのですが、壁にアクセスできる場所が1カ所しかなくて、ほかの場所ではできませんでした。資料を搬入する前にやっておけばよかったと後悔しました。

大雨の日の後は点検が欠かせませんでした。湿度が急激に上がることが原因なのか、空調機の故障などは、大雨の日の後に起こっていました。建物の雨漏りも心配でした。図書を置

いている部屋ではなかったのですが、実際に工学部 8 号館で雨漏りがありました。

## ケース 1 工学部 8 号館

具体的に移転中に起こった問題や事件などをご紹介します。まずは工学部 8 号館です。こちらは 7 階に 3 部屋、8 階に 2 部屋借りていまして、7 階の 2 部屋は臨時閲覧室と新規受け入れ図書を置くためのスペースとして使っていましたが、主に保管していたのは漢籍です。資料を床から離すためにコンテナパレットを使用していました。8 階の床はもともとカーペットが敷かれていました。事務室が同じ建物にあったことと、やはり漢籍を保管しているということで、温湿度を毎日確認しました。

5 月に、7 階 719 で床にシミが発見されました。これが最初に発見された虫だったのでドアに虫マークを張って注意を喚起していたのですが、ほかの部屋からも続々と虫が発見されてしまいました。

6 月には、802 の漢籍を保管している部屋で、床にシバンムシが発見されました。こちらは一度に 1 匹だけではなくて 2~3 匹発見されたのですが、トラップにはかからないようなので、しばらく頻繁に目視点検を行いました。結局、6 月中に 9 匹が、ほとんど窓の近くの床で見つかりました。ただし、これは後日文化財虫害研究所に同定を依頼したところ、ヒメカツオブシムシも含まれていたことが分かりました。

8 月には、配水管にヘドロがたまっていたせいで、空調機から水漏れがありました。使用前には、空調機のフィルターは清掃したのですが、配水管までには考えが及びませんでした。当日すぐに業者に修理してもらい、様子を見ながら運転を再開しました。



シミと脱皮殻（農学部）



左 タバコシバンムシ  
右 ジンサンシバンムシ(エ802 6/17)

## ケース 2 駒場学生会館

次に駒場学生会館についてご報告します。こちらは旧生協食堂にベニヤ板で囲って保管していました。そのため、すぐ隣が厨房で機材もそのまま残っていて、油のにおいがするような場所でした。2 階は雨漏りがしていましたが、1 階には影響がないということでお借りして

いました。こちらでは雑誌・年鑑・大型図書を保管していました。

5月に窓ガラスが割れるという事件がありました。窓の方もベニヤ板で覆っていたので風雨の影響は少ないのですが、すぐに総務から駒場の施設担当に連絡してもらって、修理してもらいました。

6月には、通用口が開いていました。広い建物ですので出入り口が多く、搬入したときに点検漏れがあったようで、最初から開いていたのだと思われます。このぐらいの時期からゴキブリが多く捕獲されたので、トラップを増設しました。調査が目的で置いていたのですが、できるだけ捕獲したいということで増やしました。また、殺虫剤も設置しました。

8月ごろに段ボール箱がつぶれ始めました。動かせるところは新しい段ボール箱に入れ替えました。

資料の再移転が近づいてきてからなのですが、3月になってベニヤ板の囲いの外でネズミの死がいが発見されました。また囲いの外側に設置した殺虫剤が幾つか消えてしまいました。次の月に行ってみたところ、厨房のカウンターの上に猫のものらしき足跡が発見されたので、犯人は猫なのかなと考えました。



ニセセマルヒョウホンムシ(医学部)



ヒメカツオブシムシ成虫(工802 6/7)

### ケース3 医学部1号館

最後に医学部1号館です。こちらは4階に2部屋借りていまして、SC401に貴重書洋書、朝鮮古籍、NC401に未整理地図等を保管していました。入り口に粘着テープトラップを設置しました。

こちらでは5月にニセセマルヒョウホンムシが大量発生しました。名前にあるとおり動物標本を食害する虫で、ほかにもペットフードなどを食害します。こちらの医学部の部屋は動物実験室だったところを改修して使用したということもあり、また、現在もほかのフロアで動物を飼育しているので、それが影響しているのかもしれませんが。このときも一度に20匹以上生きているものが捕獲されました。トラップで捕獲されているものもあるのですが、床をはっていたものが多いです。羽がくっついていて飛



べない虫で、動きも遅いので、セロハンテープで捕獲しました。5月、6月ほどではないのですが、年間を通じて継続して現れていました。出入り口の粘着テープでも捕獲されていたのですが、部屋に入ってくる虫を捕まえられていたのかは不明です。発生源は特定できなかったのですが、部屋の中から出ていった虫かもしれません。

6月にはヒメカツオブシムシが捕獲されました。これは幼虫ではなくて成虫なので、文化財を食害することはないのですが、これも文化財虫害研究所に同定してもらいました。いずれも動物性のものを食害する虫ですが、革装のものが多い洋書貴重書を置いていたので問題になりました。けれども、被害はありませんでした。

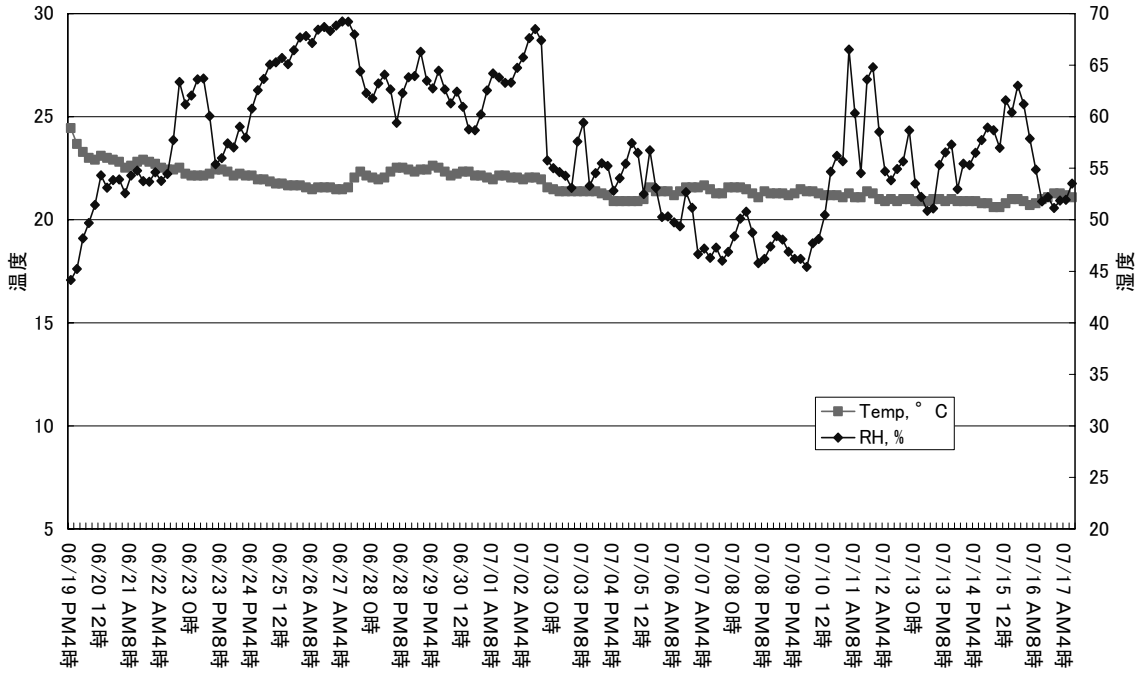
### 温湿度調査の結果

温湿度調査の結果ですが、データ量が多いので、梅雨のシーズンの2カ所だけグラフをご覧ください。工学部は瞬間的に高湿度になることはあったのですが、平均は55%以下をほぼ保っていました。一般的に温度は18度～22度、湿度は45%～55%が紙資料の保管には最適といわれています。農学部でも空調を使用していましたが、効果があまり出なくて、高温・高湿度の時期がありました。

駒場は梅雨の時期、温度、湿度ともに高いです。第2本部棟も平均湿度が高かったです。6月から10月は常に60%以上で、70%～80%以上になる部屋もありました。温度の変化はとても緩やかでした。駒場には空調があったのですが、遠隔地で何が起こっても対応できないので、空調を使用することは断念しました。



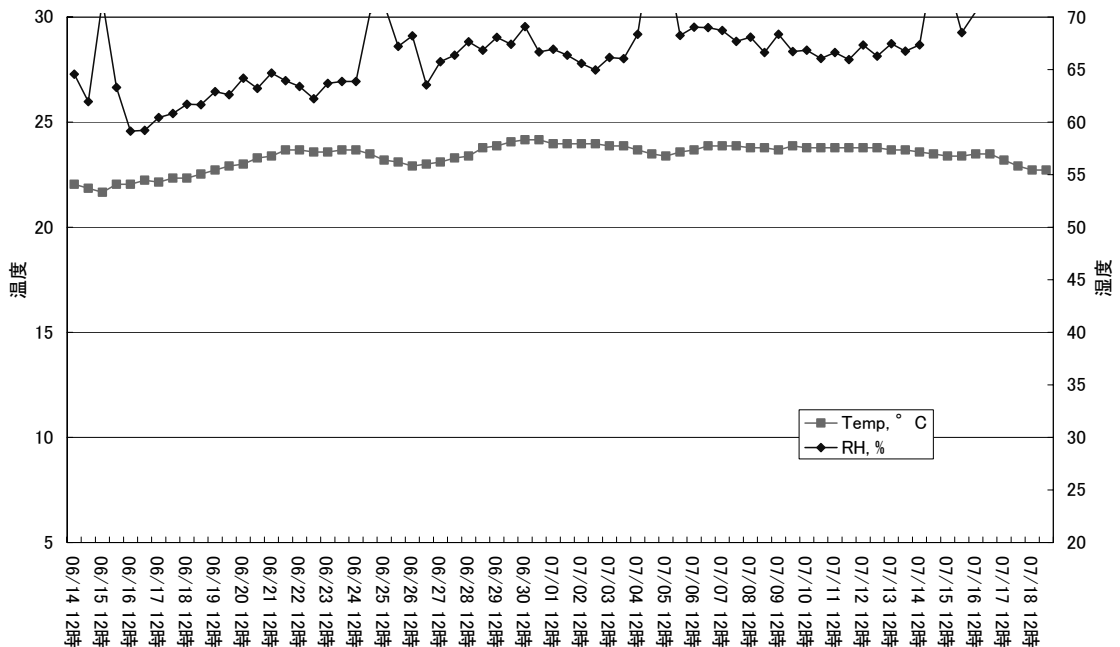
工801A(6月19日~7月17日)



工学部 8 号館 801 号室の 6 月 19 日~7 月 17 日のデータ

7 月 3 日から空調を冷房からドライに切り替えた

駒場1(6月14日~7月18日)



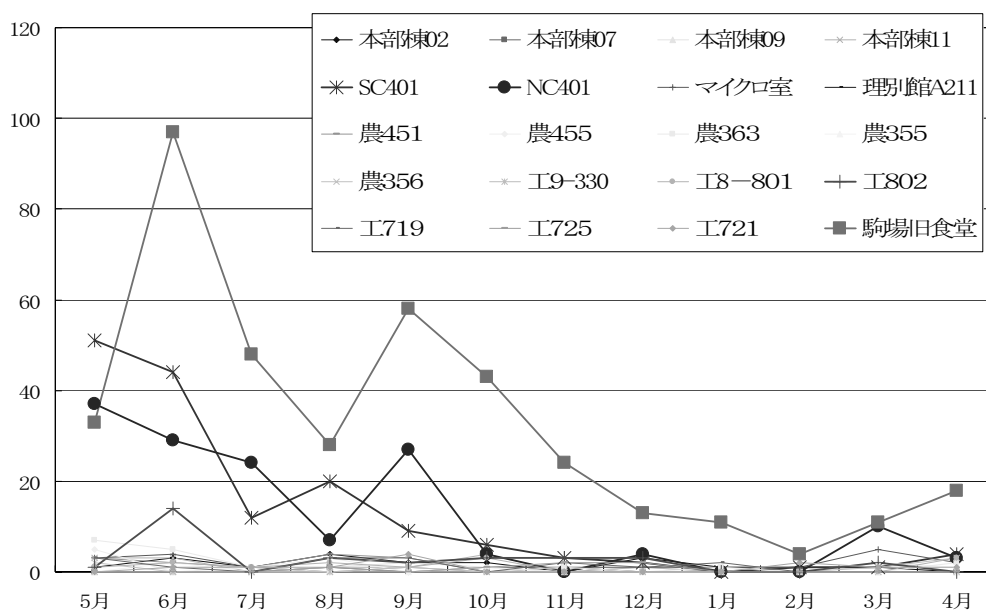
駒場学生会館旧食堂の 6 月 14 日~7 月 18 日のデータ

## 昆虫類調査の結果

昆虫類調査の結果を表とグラフにまとめました。虫の捕獲数を見ると春に活発になっていて、真夏には少し落ち着いて、また秋に増えて、冬に向けてだんだん減ってくるというふうになっているのが分かります。ニセセマルヒョウホムシが大量発生したため医学部の捕獲数が多くなっています。駒場の書籍食害虫はほとんどがゴキブリです。

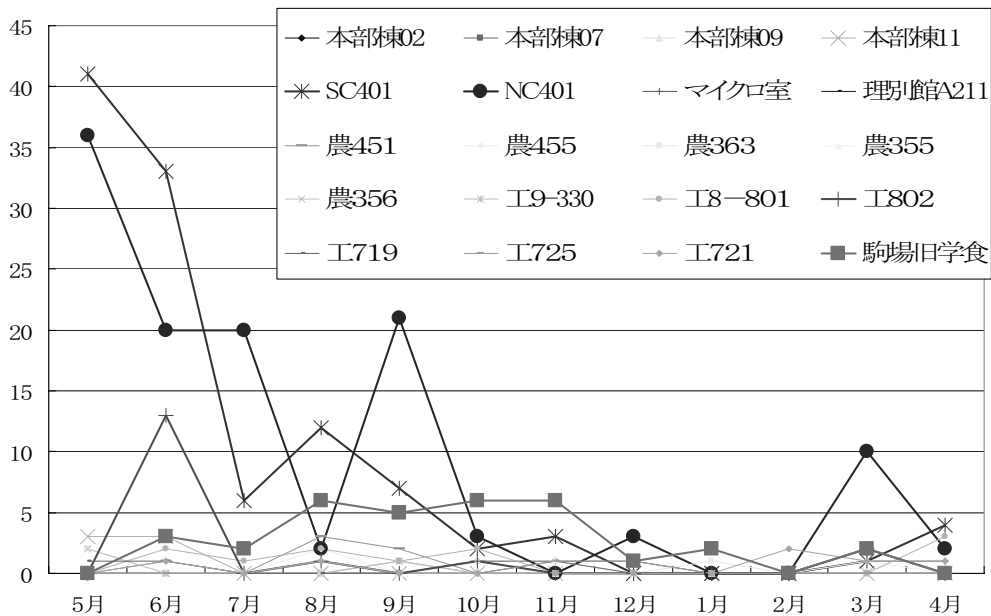
## 昆虫類捕獲数（全体）

場所	㎡	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	合計	/100㎡
本部棟02	40	1	3	1	4	2	2	0	3	1	1	1	0	19	47.5
本部棟07	21	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	2	9.5
本部棟09	21	0	0	0	1	2	1	0	1	0	0	0	0	5	23.8
本部棟11	21	3	3	0	1	1	4	0	1	0	0	0	0	13	61.9
SC401	52	51	44	12	20	9	6	3	2	0	1	1	4	153	294.2
NC401	52	37	29	24	7	27	4	0	4	0	0	10	3	145	278.8
マイクロ室	26	3	4	1	0	0	1	1	1	1	1	5	2	20	76.9
理別館A211	21	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
農451	56	3	2	1	4	3	0	1	0	0	0	0	0	14	25.0
農455	56	5	0	1	3	0	1	0	0	0	0	2	1	13	23.2
農363	40	7	5	1	0	1	0	1	0	1	0	0	2	18	45.0
農355	28	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	7.1
農356	28	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3	10.7
工9-330	30	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	3	5	16.7
工8-801	78	1	2	1	2	1	3	0	0	0	0	0	3	13	16.7
工802	80	1	14	0	3	2	3	3	3	0	0	2	0	31	38.8
工719	26	3	1	0	3	3	0	2	1	2	0	0	0	15	57.7
工725	26	0	0	0	1	0	1	2	2	0	0	0	0	6	23.1
工721	52	0	1	1	1	4	0	0	0	0	2	1	1	11	21.2
駒場旧食堂	300	33	97	48	28	58	43	24	13	11	4	11	18	388	129.3
全体	1054	150	207	91	79	115	69	38	31	16	9	34	37	876	83.1



## 昆虫類捕獲数（書籍食害害虫）

場所	平米	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	合計	100㎡当たり
本部棟02	40	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	2.5
本部棟07	21	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
本部棟09	21	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
本部棟11	21	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	28.6
SC401	52	41	33	6	12	7	2	3	0	0	0	1	4	109	209.6
NC401	52	36	20	20	2	21	3	0	3	0	0	10	2	117	225.0
マイクロ室	26	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	1	1	5	19.2
理別館A211	21	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
農451	56	0	1	0	3	2	0	0	0	0	0	0	0	6	10.7
農455	56	2	0	0	2	0	1	0	0	0	0	1	0	6	10.7
農363	40	2	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	5	12.5
農355	28	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
農356	28	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3	10.7
工9-330	30	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	3.3
工8-801	78	0	2	1	2	1	2	0	0	0	0	0	3	11	14.1
工802	80	0	13	0	1	0	1	0	0	0	0	2	0	17	21.3
工719	26	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3	11.5
工725	26	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	3	11.5
工721	52	0	1	0	1	0	0	0	0	0	2	1	1	6	11.5
駒場旧学食	300	0	3	2	6	5	6	6	1	2	0	2	0	33	11.0
全体	1054	87	77	29	30	39	17	13	6	3	2	18	11	332	31.5



注1) この表のひと月は、前の月の第3週の調査日からその月の第3週の調査日までとなっている。

注2) ㎡：部屋の広さ

注3) /100㎡：100㎡あたりの昆虫類捕獲数

注4) 書籍食害害虫に含めたのは、ゴキブリ、シミ、シバンムシ、カツオブシムシ、ニセセマルヒョウホンムシ。このうち紙を食害するものは、ゴキブリ、シミ、シバンムシだが、布製帙や革装や羊皮紙を食害する恐れのあるカツオブシムシ、ニセセマルヒョウホンムシも含めた。

## 改修による改善

いろいろと事件はありましたが大きな被害もなく、無事に資料を戻すことができました。改修による改善も行えました。実は移転前の2006年6月に業者による昆虫類調査を行っていて、その時点で建物を改修することが決まっていたので、戻るときのアドバイスをいただいていた。また、今までの古籍保全講演会や研修で学んだ知識もあって、改修についてさまざまな要望を出しました。

虫の侵入を防ぐために窓をふさぐ。ドアの下の隙間をふさぐ。また、壁と床の継ぎ目にアールを付ける。これは壁面と床面の接点をカーブさせて継ぎ目がない状態にするということです。ごみがたまらずに掃除がしやすくなります。荷受け室が今までなかったなので、荷受け室を設ける。排水系統の確認を行う。移転前の昆虫類調査のときにチョウバエが発生していたので、排水系統を確認するようというアドバイスを受けていました。ほかに調湿システムを入れることも提案しました。

窓をふさぐことは改修といっしょにやっていただけでしたが、ドアの下のすき間をふさぐというのはできませんでした。また、壁と床の継ぎ目をなくすというのも、壁面にも書架を立てたために、そういう施工はできないということで実行されませんでした。要望した荷受け室についても、研究所内のスペースが足りないために設けていただくことができませんでした。

排水系統の確認ですが、上下水両方とも配管を新調できたので解決済と思っていましたが、チョウバエがまだ発生していました。周囲をよく調べてみたところ、以前の配管のふさがっていない部分が発見されたので至急ふさぎました。設備が新しくなっても古い部分が残っていると注意が必要です。新しい調湿システムも入れてもらいました。こちらはデシカント除湿という、フィルターに吸湿剤が入っているタイプのもので、配水管がないので水漏れの心配がありません。ただ、冷暖房は改修前からの空調機を使用しています。調湿システムも、最初思ったような効果が出なかったため、業者に調整してもらいました。

## 改修後の環境調査

改修後の環境調査についてもご報告します。資料を戻す前に有害物質調査を2回行いました。1回目を5月、2回目を6月に行っています。2回目のときにはもう基準値以下かほぼ基準値になっていましたので、その後、資料を戻しました。ただアンモニアはコンクリートから時間がたってから出てくることがあるので、今後注意が必要という報告を受けています。

現在、第2水曜日を閉室日にさせていただいて（2009年3月まで）、この日を書庫内整備の日としています。トラップの確認や温湿度データの回収、清掃を行っています。このときに使用する調査票は、移転中に使用していたものを修正したものを使用しています。また、温湿度の計測回数も、1日2回では少なすぎると感じたので4回に増やしました。

### 今後の課題

今のところ目立った被害はありませんが、環境が変わると資料への影響が大きいめしばらくは注意が必要だと思います。他部局でも改修後の建物でカビが発生したことがありました。

10月から行っている昆虫類の調査でチャタテムシが多いのが目立っています。冬のあいだ書庫内の湿度は低くなっているのですが、移転中の湿度が高かったことが影響しているのかもしれない。今後のカビの発生には注意が必要です。

工学部8号館の802の部屋で出ていたシバンムシ類は、外から入ったものであろうという報告をいただきましたが、書籍から出てきたものの可能性も皆無ではありません。資料を移転した後に、改修工事が入る前の建物に入って、窓の棧から虫の死がいをいくつか回収しました。これを文化財虫害研究所の同定調査に出したところジンサンシバンムシやヒメカツオブシムシだということが分かりました。この階から802に資料を移転しているので、資料から出てきたのではないかと少し心配しています。

また、調湿機も設置してまだ1年たっていないので、これの調整についてはこまめに様子を見る必要があります。設備の改善についても、ドアの下のすき間をふさぐとか、ごみ箱にふたを付けるとか、荷受け室を設けるとか、さまざまなことをこれからも要望したいと思います。

これも重要なことですが、緊急時の対応マニュアルをまだ作成していないので、なるべく早く作成する必要があります。そのときには、今回の移転の経験を役に立てることができると思います。改修したといっても新築というわけでもないので、特に雨漏りの心配などもあります。

東洋文化研究所図書室は今後も資料を注意深く見守っていきたいと思います。これで私の報告は終わりにさせていただきます。ありがとうございました。



## アジア貴重古籍の電子図書館建設と保全事業

田 崎 淳 子 （東洋文化研究所図書室 資料受入担当係長）

### 0. はじめに

私どもの報告の最後になりますが、当研究所の「アジア貴重古籍の電子図書館建設と保全事業」（平成 17～20 年度）についてお話させていただきます。

本事業は、下記の 4 つの内容を柱として展開されました。

- 1) 貴重古籍保存書庫の設置
- 2) 貴重古籍の補修
- 3) アジア 古籍電子図書館建設
- 4) アジア 古籍保全に関する研修

以下、この柱それぞれについてお話していきます。事業自体が 4 年間にわたる規模の大きいものでしたので、本日のお話は大変駆け足になりますことをご了承ください。

### 1. 貴重古籍保存書庫の設置

貴重古籍保存書庫そのものについてお話する前に、まず東洋文化研究所の貴重資料とそれまでの保存環境についてご説明したいと思います。

東文研の主要コレクションとして 11 万点に及ぶ漢籍がございます。書庫 9 フロア中 2.5 フロア分を占める分量です、と申しあげるとおおまかにイメージをつかんでいただけるでしょうか。本研究所ではこれらは特別貴重書、もしくは貴重書のどちらかに該当します。

この漢籍群の保存環境がどんなものであったかは、図 1 をご覧ください。上部中央の写真を見ていただくと、右の方に木製戸棚があり、その向かいに一般資料のスチール製の書架がすぐ迫っている様子がお分かりになると思います。書庫の中にこのような木製戸棚一本研究所の前身である東方文化学院東京研究所から引き継いだ歴史あるものなのですが一を 8 台置いて、そこに特別貴重書の一部を収納しておりました。ガラス戸棚の中の写真で、帙に入った漢籍が縦横にほとんどすき間なくきっちりと詰め込まれていることがお分かりになると思います。このスペースに置けなかった他の漢籍（特別貴重書の残りを含む）は、別フロアのスチール製書架に帙に入れて立てた状態で並べていました。

また、漢籍以外の特別貴重書として、12世紀から20世紀という幅広い期間に及ぶアラビア語写本「ダイバー・コレクション」を所蔵していますが、やはり書庫の一角に置いてある桐の箆笥に収納しておりました。

漢籍の場合は一般書架に並べていたとは言え、その分量が多いためフロア単位で貴重書の在りかだと認識できていましたが、洋書や和書の貴重書は一般資料と同じ分類を与えて混配している状況でした。当時資料のための空調管理もしておらず、貴重書の管理という点では東洋文化研究所はだいぶ貧しい環境にあったと言うことができるでしょう。こういう事情から貴重書の保存環境を改善したいという要望を長年持っておりましたので、このアジア古籍保全事業という取り組みにあたって、貴重古籍保存書庫の設置が大きな柱のひとつになったわけです。

さて、そのような背景のもとに私どもが実際にどういう貴重書庫を考えていったのかということですが。現状の問題点—今までお話してきたような状況ですので、すぐに幾つも幾つも数えることができます—を把握し改善点とすると同時に、学内外の図書館等で貴重書庫をお持ちのところを見学させていただいて、その良い点を取り入れて要望していくことにしました。そうしてまとまってきたのは、まず環境管理にかかわる次のような要望です。

- ①望ましい温湿度管理ができる。
- ②きれいな空気が常時供給されてかつ停滞しない。また資料に直接風が当たらない。
- ③空気中の化学物質をできるだけ除去する。

この3点に対しては、性能の高い空調機を導入することで実現することになりました。

また、資料管理上、火災や盗難はもっとも恐れなければいけない事態ですので、それぞれの対応を考えました。日本が地震国家であることも自明ですので、耐震性の高い頑丈な書庫にしたいという希望も出しました。



図1 過去の特別貴重書保存環境

こうやってあれもこれもと夢や希望を羽ばたかせながら、でも実際どれだけのスペースと予算を本当に投入できるのかという現実的な制約がもちろんありますので、その両方をすり合わせて計画を具体化していきました。

図2は貴重古籍保存書庫の内部の様子で、まだ書架を設置する前の状態です。この書庫を所内のどこに置くのかいろいろ検討されたのですが、結局床の強度とスペースの関係から1階書庫の一角が設置場所になりました。床面積32㎡という非常にコンパクトな貴重書庫です。壁は二重壁で、外側の一次壁が耐火性と防盜機能を持っています。内側の壁には調湿パネルを貼って、空調機が止まるなどの不測の事態があっても資料を急激な湿度変化にさらさないようになっています。1階という場所柄の心配もあるため、扉には金庫並みの防盜性を持たせました。耐火性については、外側が80℃で1.5時間、内部が持ちこたえる程度です。消火設備は貴重古籍保存書庫の中には設けていません（後にこのフロア全体に窒素ガスの消火設備が設置されました）。また、阪神淡路大震災クラスの地震に対応したものと要望した結果、もし1階の床が抜けてこの書庫が落下したとしてもこれ自体はつぶれない、と言われる書庫になりました。

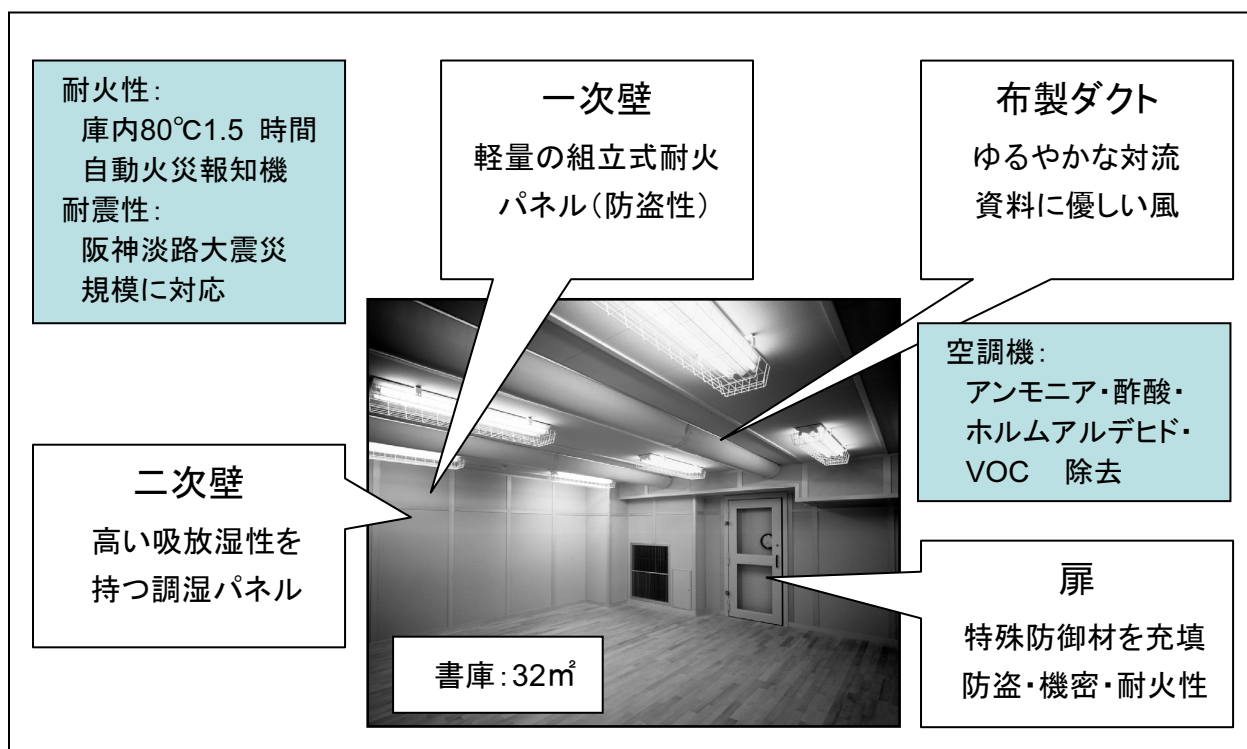


図2 実現した貴重古籍保存書庫

この貴重古籍保存書庫が完成したのは平成 17 年度末です。32 m<sup>2</sup>という限界からやはりすべての特別貴重書の中に入れることはできず、特に重要なものを選定して収納することになったわけですが、その作業が終わった直後に研究所自体の耐震問題が発覚し、てんやわんやの事態に陥ってしまったのは、本日冒頭の所長の挨拶や、先ほどの安食の報告の中で既にお話しているとおりです。それから 2 年半、耐震改修工事の資料移転が完了して今年無事にまた特別貴重書を再配架できたことを、本当に感慨深く思っております。

## 2. 貴重古籍の補修

漢籍や「ダイバー・コレクション」を始めとする貴重資料の劣化について、本事業では補修などの手当てをいろいろ行っておりますが、今日は時間の関係もありますので、特に私たちにとって、劣化した資料を直したという意味合い以上の要素を含むもの 2 点について、お話ししたいと思います。

まず 1 点目は、平成 18 年度に実施した漢籍叢書部悉皆調査とその後の手当てです。漢籍の叢書部は、以前から閲覧利用頻度が高い傾向がありました。いわゆる善本の類ではないのですが、現資料が群として頻繁に利用されています。今後も同様のサービスを続けていって本当に大丈夫かどうか心配になり、利用方針を再検討するために悉皆調査を行うことになりました。

対象資料の点数は 385 点、2 万 5,000 冊ほどになります。年代は清から民国のものがほとんどで、本文紙は手漉き紙のほか木材パルプ紙（洋紙）が使われていると言う特徴があります。利用に支障があるかという点を主眼に、帙や綴じの状態、資料の見開き度、料紙自体の強度（折り曲げにどの程度耐えうるか）などを調査項目としました。調査と並行して、綴じ直しや傷んだ表紙の付け替えを行い、資料自体の強度も高めています。この調査結果から、漢籍叢書部の状態は全般にほぼ良好であり、当面良識ある通常の利用に耐えられるだろうという結論を得ることができました。

ただし、結果の中で気になる点がありました。料紙の酸性度が全体に予想以上に高かったことです。普通の洋紙であったなら触れると破断してしまうようなレベルの値なのに、この漢籍の料紙では、実際触ってみると分かるのですが、利用に問題ないしなやかさを維持しているという不思議がありました。非常に興味深いと同時に、このまま保存と利用を続けていって長期的に見て本当に大丈夫なのかが気になります。漢籍の料紙の耐久性については、科学的な分析による検証を待ちたいと思いますが、やはり将来的に脱酸について検討してい

なければならぬと考えております。

2 点目として、マイクロリールの状態調査と手当てを取り上げたいと思います。他の修復対象がすべて一次資料だったのに対しマイクロリールは複製物なのですが、貴重資料の電子化を行う際に撮影したものを多く含んでいて研究所としては重要なものです。以前から、それらがいわゆるビネガーシンドロームという状態にありながら手をつけかねてきた、という状況でしたので、今回の手当ては私たちとしては画期的な試みになりました。

まずサンプル調査を実施して、問題が資料全体でどのくらいの規模に及ぶのか状況を調べました。その結果から、劣化フィルムの数と程度の予測ができましたので、それを根拠に予算要求して悉皆調査を実施し、どのフィルムに手当てをすべきか特定することができました。最終的に昨年度には TAC ベースネガフィルム 1,960 本の PET ベース複製を行うことになり、ネガフィルムに関してはビネガーシンドロームという悩みから解放されることになりました。

### 3. アジア古籍電子図書館建設

この事業では、既に公開されていた「漢籍善本全文影像資料庫」というデータベースのデータ拡充や、「ダイバー・コレクション」、「雙紅堂文庫」といったコレクションの電子化も進めておりました。平成 19 年度にはこれら複数のデータベースを「アジア古籍電子図書館」(図 3) というプラットフォームのもとに公開することができ、一次資料そのものの利用負荷を減らすと同時に、来所していただくなくても資料を閲覧できるという面でサービス向上も果たせたと考えております。このアジア古籍電子図書館の拡充はもちろんこれで終わりではなく、今後も研究所をあげて電子化を進めていくことになろうと思います。

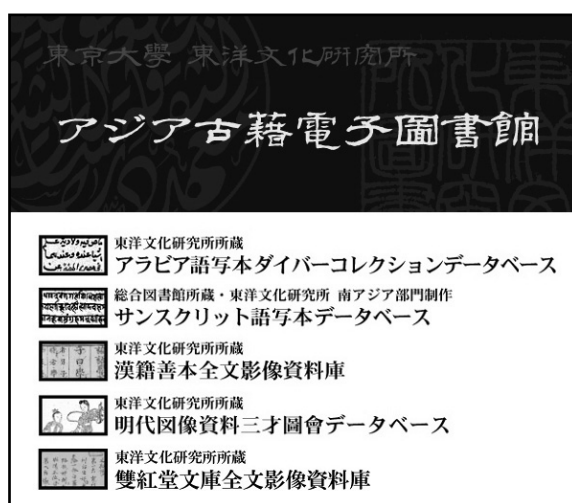


図 3 アジア古籍電子図書館  
<http://imglib.ioc.u-tokyo.ac.jp/>



#### 4. アジア古籍保全に関する研修

研修については、「古籍保全に携わる職員に役立つ研修を実施する」という枠があっただけで、内容や規模などは私たちが自由に企画することができました。もともとこのような講演会や研修開催などのノウハウがあったわけではありませんので、いざ開催するに当たって発生する事務量が予想以上に多いことに、特に最初は驚いたものです。講演会の規模を大きくすればするほど、われわれ自身が当日の事務に追われてしまい講演を聞くことができないという、本末転倒になってしまった面もありました。これは私たちにとって古籍保全研修であると同時に、講演会開催研修でもあったのだなあと振り返ったりしております。

さて第1回から一緒に思い出をたどっていただきたいと思います。最初の年は資料保全の基本となる環境管理についてきちんと知識を得たいと考え、関連の講演を中心に据えることにしました。また、資料保全にかかわるいろいろな現場のお話をお聞きしたいという気持ちがありましたので、ワークショップを3種類計画し、とても盛りだくさんな1日になりました。

本図書室は、当時も今も常勤非常勤あわせて12名前後の体制でやってきているのですが、この人数では第1回講演会の開催は事務的に本当にぎりぎりの面がありました。アンケートでは「ワークショップ形式のものをもっと開いてもらえるとうれしい」というご意見をたくさんいただきましたが、同じような形で継続開催していくことには困難を感じ、その後ワークショップの実施は果たせておりません。

この講演会で勉強させていただいた環境管理の知識が、次の年度で耐震工事や移転に取り組む際いろいろな場面で即生させることになったということは、先ほど塩川の方からお話したとおりです。

研修の機会を毎年度設けるというノルマが最初にあったわけではありませんが、1年目が予想以上に好評で「継続開催してはどうか」という所内の声をいただきました。このように業務に必要な事柄について、それを学ぶ場を自分たちで設定するチャンスを与えられることが本当に得がたいことは身にしみて承知しております。こうして2回目以降が実現することになったのでした。

さて2年目は、中国国家図書館での資料保全の取り組みについてのご講演と、本研究所所蔵の中国書、漢籍の劣化調査結果（「2. 貴重古籍の補修」で述べた叢書部悉皆調査の中間報告）という二つの話題がリンクし、漢籍に焦点が当たった年になりました。それから、1年目の環境管理の続編にあたるカビの対策や、学内の経済学部図書館での取り組み（1年目の

ワークショップでお話いただいた内容が好評でした) とその後の活動についてご講演いただきました。

また、昨年度の第3回目は少し毛色を変えて、紙という資料媒体を考えてみようという企画になり、イスラム研究者、修復家の方、また紙の製造業に携わる方それぞれに、紙にまつわるお話をいろいろな角度からしていただきました。それから、マイクロ資料の状態を把握するための方法論についてご講演いただき、それに対応する形で本研究所が実施したマイクロリールの状態調査についてお話いたしました(「2. 貴重古籍の補修」で述べた取り組みの中間報告)。これまで講演会開催や他の研修を通じて、資料保全について学んでまいりましたが、その成果を業務に反映しご報告できたという点で、私たちにとっては非常に意義深い機会であったと思っています。

そして4年目の今回は、初めて具体的なテーマ「災害と資料保全活動」を掲げての開催になりました。その理由として、既に何度もお話に出てきていますとおり本研究所が耐震対応を終了した年だということがあります。資料の移転、戻し入れ等に追われたこの2年半は研究所としても図書室としても、苦労や悩みが多い時代でした。それがようやく無事終わって、気持ちとしてはめでたしめでたしというところもあるのですが、建物が耐震基準を満たしているというのは当然といえば当然の話であって、冷静になれば地震から資料を守るための対策をこれで果たしたとは言えないだろうと考えています。

「建物は耐震工事を施した。頑丈な貴重書庫ができて、そのフロアにはガス消火設備も備えている。幸い、東京大学のすぐ近くにはちゃんと消防署もある。図書室のサービスも再開できて、ばたばたの日々は思い出になりつつある。でもそれで果たしていいのだろうか」というのが、今の私たちの立っている場所です。過去の講演会を経て、虫やカビから資料を守っていこうという意識は定着しましたが、もし地震が来たら火事が起こったら資料が水にぬれたらというような有事に、今の私たちに何ができるか、どう動いていけるのかと問いかけてみると、現時点では備えも自信も全くないというのが正直な答えです。本当の意味の災害対策というのは、ここから、ゼロから始めていかなければいけないものなのだとすることを、今日の先生方のお話をお聞きして痛感しております。

過去4回の反省としては、例年企画の段階で時間がかかってしまい、できるだけ早く開催したいのに年度の後半にどンドンずれ込んでしまったという点があります。それから、こんな内容のお話を聞きたいけれどでは実際にどんな方にその講演をお願いできるものか、というところでまた悩みまして、毎年頭を痛めてまいりました。振り返ると本当にいろいろな方々

にお世話になりました。アドバイザーとして企画の面で本当に貴重なご意見をくださった方があります。それから毎回、ご講演者の方々に対して私たちからつたないお願いをするところから始めていくわけですが、このお願いに当たっては、つてをたどって口を聞いていただいたり、つてのつてを頼みにご連絡したり、突然伺って「私たちはこういうものです。こんなことをしています。よろしくお願ひします」といきなり頼んでみてそれがうまくいったりうまくいかなかったり、はては熱いラブレターのようなものを書き上げてそれをお送りしてお願いしてみたりと、怖いもの知らずと申しましようか、振り返ると大変気恥ずかしいやり方を重ねてまいりました。私どもの無礼をお許しいただいて快くご対応くださった講演者のみなさん本当にありがとうございます。また、こうやって準備してきた講演会に本当にお越しくださる方々があつてのこの4年間であり、継続開催だったとも思います。本日は本当にありがとうございました。

平成18年2月、建物の耐震強度が非常に低いことが公表された直後に、職員全員にヘルメットと銀色の防災リュックが配られ、これからいったいどうなることやらと途方に暮れたのを思い出すことが今でもときどきあります。そのときに呆然としながら撮った写真が今回出てまいりましたので、本日の締めにとちょっとご覧いただき、あれからずいぶんいろいろなことがあつたなあという私の感傷にしばしお付き合いください。



図4 最初の耐震対策

これで東洋文化研究所からのお話を終わらせていただきます。本日はどうもありがとうございました。